

利他的行為論

—— 社会福祉実践の基盤に関する一考察 ——

田 中 治 和

序

本稿の課題は、社会福祉実践の基盤となる《利他的行為》に関する若干の考察にある。かつて私は、社会福祉の存在理由および必然性を次のように論じた。

「現代社会に生きる人間が、誕生から死に至るまで、すべての人生の各段階において、自らの力（自助）、並びに家族・親族および地域共同体での助け合い（相互扶助）で、生存・生活の維持、発展させることができるならば、社会福祉や社会保障制度の成立する必然性は生じない。」¹⁾ と。つまり自助と相互扶助での対応の限界に社会福祉成立の根拠を求めたのである。

とすれば、相互扶助の限界が、直接社会福祉実践の生成を招来させたかといえ、否である。社会福祉史が教示するように、わが国に限定しても、慈恵（善）・救済→慈善事業→感化救済事業→社会事業→厚生事業→社会事業→社会福祉といったように、連綿としたなかで社会福祉実践が位置づけられる。特に注目すべきは、社会福祉実践が展開するはるか以前、つまり個々の慈恵（善）・救済や慈善事業の基底となり、現在の社会福祉実践の底流にも連なり、かつ基盤となっていると思われる《利他的行為及びその理念》の存在である。

以下本稿では、まず（1）利他的行為に関する概念措定を試み、次に（2）利他的行為の始原的な理念型としての“慈悲”並びに『新約聖書』「ローマ人への手紙」の一節を考察し、そして（3）利他的行為における他者とは何かを『新約聖書』「ルカによる福音書」の“良きサマリア人への譬”を援用・検討し、さらに（4）利他的行為の限界とその陥穽についても論究したい。

I

一般に《利他》とは「自分を犠牲にして他人に利益を与えること。他人の幸福を願うこと。」²⁾ と解釈されている。

私は、利他的行為を相互扶助—血縁・地縁・職業・団体等で生ずる自然発生的な同類意識に基づく助け合い—の限界に対応する援助行為と措定しておく。むろん相互扶助に関しては、種々の所説³⁾があり、利他的行為を広くその中に包含する見解もあろう⁴⁾。

しかしながら、なにゆえ、人は人を援助し、支援しようとするのか……。それが自らにとって

直接的間接的にしろ、血縁つまり家族・親族や地縁等を前提としての人間関係があるならともかく……。どうしていわゆる《赤の他人》の人生に関与するのだろうか、時として自らの人生をかけてまでも……。慈善事業家・社会事業家と呼ばれる人々の生涯⁵⁾を垣間見ればその感を一層強くする。それゆえ本稿では、相互扶助と利他的行為の概念整理上の曖昧さを残しながらも、後者に重点をおいて叙述していく。

利他的行為を具体的にみれば、他者の悲しみ・苦しみ・痛み等々の不幸を、自らの悲しみ・苦しみ・痛みとして感じ、助けよう、助ける行為といえる。利他的行為を別の言葉で代置し考えてみたい。通例利他的行為をなす人を何と呼称するか……。大半は《優しい人》であろう。では優しい人とは、一体どんな人なのか、その必要条件とは何か。《優しさ》とは語源的には「人偏に憂える」つまり他者を心配することである。また「喪に服してかなしむ人の姿を優といい、またその所作をまねするものを優という。」⁶⁾とも。優しさという言葉の背景には、やはり他者の不幸を思慮する点が看取できよう。このように《利他的行為》と《優しさ》は概ね同じものといえる。

利他的行為（および優しさ）の本質を解く鍵として、以下仏教並びにキリスト教の文献等の用語・術語から考察していく。それは、利他的行為およびその理念が、歴史的には宗教と不可分な関係で形成されてきたためである⁷⁾。

（ただし本稿の立場は、考察する出典を、経典あるいは信仰の対象としてはとらえない。むしろそれらの文献等が、悠久の時間と広大な空間を超越し得た歴然たる事実の重みと、そこに伏在するであろう人類普遍の古典（文化的遺産）として取り扱う。）

II-(1)

“慈悲”について。利他的行為の理念型の一つとして、慈悲という言葉（術語）を考察する。慈悲の語義・語源は多岐にわたり所説はあるが、ひとまず以下のように整理する。

「〈慈悲〉は元来、他者に利益や安楽を与える（与楽）いつくしみを意味する〈慈〉（maitri 友愛＜mitra 友〉と、他者の苦に同情し、これを救済しようとする（拔苦）思いやりを表す〈悲〉（karupa）の両語を併挙したもの。」「また、慈を父の愛に、悲を母の愛にたとえることもある。」⁸⁾ さらに『法界次第初門卷上之下』には、“四無量心”の中に次のように記載されている。「一慈無量心 能與他樂之心。名之偽慈。……略……、二悲無量心 能拔他苦之心。名之偽悲。」（大正新修大藏經』第四十六卷諸宗部三、大正一切經刊行會、1927年、672頁中）。

すなわち、慈悲とは端的には、与楽拔苦となり、図式化すれば、慈は楽を＋プラス（正）し、悲は苦を－マイナス（負）することを意味する。課題は、慈＝与楽より悲＝拔苦である。心象的にみても“慈”より“悲”の方が難解と思われる。拔苦つまり苦を抜くとは、何を意味するのか。「能拔苦之心」（能く他の苦の心を抜くこと）とは、具体的にいかにかすることなのか。それは苦となる根本原因の解明並びに除去を指していない。前述のように他者の苦への同情、思いやり、配慮を意味する。苦となるそのものではなく、苦の心つまり苦とを感じる者への理解、共感、苦とを感じる

心の緩和・軽減、それが“悲”なのであろう。

要するに、悲＝抜苦とは人生上の難題の解消、例えば失業、貧困、病気、孤独、要介護、生活不安等々の直接的・即効的対応(現実的にも極めて至難)は、二の次であるということである。唯々そのような状況下にある他者の苦しみ・悲しみへの立ち尽くす姿勢⁹⁾であろう。私は、この思考方法が誤りであるとか、体制順応的彌縫策と評するのではない。なにゆえ『痛むなり』とあって悲痛の意。¹⁰⁾をもつ“悲”という文字が、“慈”という文字と相俟って“慈悲”という仏教の術語として、経典に記載され現存し得ているのか。なにゆえ、楽しい心を与える慈だけではいけないのか。もし悲という文字のもつ意味が、過去から現在までの人間世界の情理、つまり人情と道理に沿わなければ、少なくとも“慈悲”から“悲”の文字は削除されるか、他の適当な文字に代替されたであろう。

しかしながら、“慈悲”として現存し得ていることは、“悲”という文字に何らかの存在理由があり、情理に沿う何かがあると言わざるをえない。そのものこそ《利他的行為とその理念》を考察する際の肝要な細部にほかならないのではなかろうか。

II-(2)

『新約聖書』『ローマ人への手紙』第12章第15節「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。」(日本聖書協会、1954年改訳)について。西暦57年—58年冬、パウロがローマに居住する信者らに送った書簡である¹¹⁾。その解釈には、当時の社会政治状況に通暁し、かつキリスト教信仰への内在的理解が不可欠となろう。それゆえ以下の考察が、牽強付会の懸念もあるが、一つの人生観に関する古典ととらえ、私見を述べていく。

まず「喜ぶ者と共に喜び」について。この説、教訓としては首肯できる。しかし「よい仲間も近ごろ疎くなりけり、隣に蔵をたてしよりのち」¹²⁾の道歌にもあるように、人間の本姓の一端である嫉妬心を想起すれば、この説の実行は殊のほか容易ではなかろう。

次に「泣くものと共に泣きなさい」について。ここで泣いているのは、大多数は大人である。分別のある大人が泣いている。その大人に対して、「共に泣きなさい」である。励ましなさい、ではない。なぜ泣くのか理由を質しなさい、究明しなさい、ではない。泣くこととなった原因を解決しなさい、でもない。唯々「共に泣きなさい」である。この「泣く者と共に泣きなさい」が2000年近い時の経過にもかかわらず修正されることなく伝承されている。なぜなのか。本当に「共に泣く」だけでよいのであろうか。(これに関しては、総括的に後述する。)

以上のように、利他的行為の理念型“慈悲”並びに「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」を考察してきたが、両者の共通点から、次の仮説を提示したい。

両者とも、二つの視点、正(＋プラス)の側面と負(－マイナス)の側面を有しており、楽しみ・喜びを加える行為と、苦しみ・悲しみ(正確にはその心を)取り去ろうとする行為である。利他的行為は、特に後者を意味する。そしてそれらは、第一義的には、実務的対応は一見何もして

いない(ようにみえる)。唯、悲しんでいる、泣いているのである。つまり利他的行為の最たるものは、具体的な金銭的・現物的援助や指導、説諭等の理性的対応ではない。さらに励ましや元気づけといった肯定的な感情への働きかけでもない。それは他者への思(想)いやり、慰め、他者の持つとりわけ否定的感情―悲しみ・苦しみ・痛み・妬み・怒り・焦り・憤り等々への共感、思慮、理解につきるのでなかろうか。

III

他者とは、誰かについて。利他的行為は、その言葉通り他者に向けられたものである。本稿では、血縁・地縁等の相互扶助の外側に、その対象があると措定し論じてきた。ならば外縁はどの辺りなのか。他者とは誰か……。

この考察には、『新約聖書』『ルカによる福音書』の“良きサマリア人の譬”を用いる。以下全文を引用する。ここでの論点は「隣人とは誰か」である。

「するとそこへ、ある律法学者が現れ、イエスを試みてようとして言った、『先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか。』彼に言われた、『律法にはなんと書いてあるか。あなたはどう読むか』。彼は答えて言った『く心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、く自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります』。彼に言われた、『あなたの答えは正しい。そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる』。すると彼は自分の立場を弁護しようと思って、イエスに言った、『では、わたしの隣り人とはだれのことですか』。イエスが答えて言った、『ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を通って行った。同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を通って行った。ところが、あるサマリア人が、旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリーブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。この3人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になつたと思うか』。彼が言った、『その慈悲深い行いをした人です』。そこでイエスは言われた、『あなたも行って同じようにしなさい』。(『ルカによる福音書』第10章25節―37節、傍線等引用者)

“良きサマリア人の譬”¹³⁾ から3つの論点について敷衍しながら考えていく。

① 不条理な悲惨な事実/状況¹⁴⁾ に直面した時に、2つの対応がみられる。1つは見て通り過ぎる人（ここでは祭司・レビ人）と見て助ける人（サマリア人）である。この違いは、何に由来するのか。

② ①と関連するが、重傷の旅人とサマリア人との関係はいわば《赤の他人》であり、民族的感情も芳しくない間柄とさえいわれている。むしろ祭司・レビ人との関係は相対的に深い。それなのにサマリア人はなにゆえ助けたのか。サマリア人は、肉体的・精神的・経済的・時間的つまり自らの総力をあげてなにゆえ助けたのか。①と②との要点は、結局のところ「彼を見て気の毒に思い」の一点につきる。人が人を助ける（助けようとする）ことに、性別、民族、国籍、宗教、職業、財産、社会的地位等は関係があるのか、ないのか、この“良きサマリア人の譬”は、根源的に問いかけているのではなからうか。確実な事実、重傷の旅人を見て「気の毒に思い」（「あわれに思い」¹⁵⁾・「不便ぶんに思ひたり」¹⁶⁾）か、否かの違い、後々の行為の分岐点になっている。《利他的行為》にとって、ある事実/状況に対する“思い”あるいは“思い立つ”ことは、その礎石であり、出立点である。（そして後述するが課題も派生する。）

③ 「隣り人とは誰か」という設問に、結果的にはこの“譬”は回答していない。困難にある人を助けた時に「隣り人になった」とし、あえて隣り人の範囲を限定していない。それは無限定であり、相互扶助の拡大・拡散ともいえる。《隣り人とは誰か》といって探すのではなく、困難や苦しみ、悲しみにある人の《隣り人になりなさい》と説いている。隣り人という概念の把握方法のコペルニクスの転回である。この発想は、「利他的行為における他者とは誰か」を考える際と符合する。これがまた、利他的行為の陥穽の1つである恣意性に連なる。

IV

他者の感情並びに気持ちへの思慮について。

ナイチンゲール（Florence Nightingale）は、『看護覚え書』（*Notes on Nursing*）の補論の一節で次のように論じる。「(看護とは) 自分自身が決して感じたことのない他人の感情のただ中へ自己を投入する能力を、これほど必要とする仕事はほかに存在しないのである」¹⁷⁾（括弧内引用者補足）と。これは看護の専門職養成を目的とした視点からの主張である。

しかし、利他的行為を考察するにあたって、このナイチンゲールの指摘は等閑視できない。それは第一に、利他的行為が、結果的にも他者の人生・生活に深く係わる可能性が高いこと。第二に、利他的行為を受ける人つまり当事者本人は、決してその置かれた状況を望んでいないこと。正確には、貧困、病気、要介護、罹災等をその大半の人々が不条理な苦痛、すなわち「みずからの責任を問われる必要のないことからさまざまな苦痛」¹⁸⁾を担わされた状況である。したがって第三に、そのような状況下において、当事者をはじめ関係者は、言葉にも表すことのできない不快

な思いを深く抱きつづけている。

いわゆる対人援助等をはじめ、人間にかかわる職業には、旧来から相手の立場に立つことの重要性が巷間言われている¹⁹⁾。だがそれは、言う易く行い難し。これに関して薄井坦子は、先のナイチンゲールの所説を論拠として次のように説く。「feelings は、人間が置かれた状況のなかでその人にひき起こされてくるものであるから、その人の置かれた状態に自分を放り込んでみないことには感じるとすることはむずかしいのである。」²⁰⁾ つまり相手の立場に立つとは、《相手の立場を感じる立場》に立つということになろう。そのためには、自らの体験を深め広げること、体験しがたいことは、想像力を高めるしかない²¹⁾。相手の立場に立つ(立とうとする)ことは、優れて実践²²⁾的であり知的な訓練を必要とする。

では、否定的感情、いわば負の気持ち、つまり苦しみ・悲しみ・孤独感にいかに対応したらよいのだろうか。結論から言えば、既述の“悲”の姿勢であり、「泣く者と共に泣きなさい」の態度に帰着する。

平易に实际的に考えて見たい。次の短歌をどう読むか。『『寒いね』と 話しかければ 『寒いね』と 答える人の いるあたたかさ』(俵万智『サラダ記念日』河出書房新社、1987年、p.18)。やさしくわかりやすい。特に補足説明は不要であろう。しかしながら異見を述べる。この短歌は事実誤認・歪曲であると。「寒いね」と2人が互いに話し合っても、気温の上昇にはならない。会話をして暖かくはならない。だが気温は上昇しないが、暖かい《気持ち》にはなる。その場の状況に、暖かさを感じる。数字で表せば「寒いねと」(−5℃) 話しかければ(×)「寒いねと」(−5℃) 答える人のいるあたたかさ(=25℃)。〈負〉²³⁾ 掛ける〈負〉は〈正〉となる。つまり負の気持ちを軽減あるいは解消するには関わる側の負の気持ちの基本的態度あることが必要不可欠といえる。

このように論じてくると、利他的行為をなす(かかわる)側の悲しい経験やそれらの中で実際に泣いた体験の有無が問われてくる。自らに《悲しみの抽斗》が幾つあるかである。他者の不幸に対応しえるものは、唯一自らの不幸にまつわる悲しみ・苦しみ等を基盤とする。それゆえ利他的行為の展開は、関わる側の人生観の転換をももたらすであろう。一般には、不幸と思われるものは忌避され、悲しみ・苦しみ等の感情は低い評価である。だが、他者の人生・生活に、とりわけ不幸—その大半は不条理なもの—に関与せざるをえない利他的行為に関わる者は、予定調和的人生観の破棄と自らの悲しみ・苦しみへの凝視が究極的には不可避となろう。この姿勢は、本来、対人援助等の職業人に厳しく望まれるものではあろうが……。

V

利他的行為の限界とその陥穽について。

まず限界から。親鸞の語録とされる『歎異抄』第四章に「聖道の慈悲といふは、ものをあはれ

み、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。……略……今生に、いかにいとをし、不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。』²⁴⁾とある。これを述懐した親鸞は、中世日本に90年近い生涯を過ごし、宗教家として数多くの苦難や悲惨な状況を見聞した人物である。その親鸞が「思うとおりに助けとおすことは、きわめてまれである。」そして「どのようにかわいそうだ、気の毒だと思っても、思うようには、救うことはできないから、この種の慈悲は不徹底である。』²⁵⁾と説いていることは、利他的行為の限界を示している。つまり人間が他者の不幸を究極的に完璧に助けることは不可能であるということである。さらに、他者理解も「井戸の深さは綱の長さ以上は測れない」²⁶⁾との喩のように、他者(相手)の深い悲しみや嘆きを計る側、つまり関わる側の理解能力を考慮すれば、これもかなりの難しさが伴うであろう。

次に利他的行為の陥穽について。三点に整理し検討する。

① 利他的行為の動機に自己満足もしくは、自らの癒しを目的とした個人的事情が入り込みやすい。利他的行為の出立点がかかわる側の“思い”である以上、またその後の展開過程でのかかわる側と受ける側との相互作用による変化²⁷⁾もあるので、個人的事情があることを一概に否定はできない。だが〈偽〉とは「人偏に為(タメ・ナす)」と書く。人のためという言葉の裏には、利他ではなく、《利己》が存在しやすいことを留意すべきであろう。

② 利他的行為が前述のように、その対象(相手)の選定が恣意的になりやすい。つまり誰が利他的行為の対象になるかの主導権は、かかわる側にある。従って受ける側からすれば、利他的行為の端緒には、かかわる側との対等関係があるとは言い難い。

③ 利他的行為は、いかなる観点、立場からしても善意・善行といわざるをえない。しかし善意・善行であるがために、問題なしとはならない。むしろその逆である。次のような諺を挙げておく。「〈親切心〉がかえって仇になる」「地獄への道は、〈善意〉によって敷きつめられている」。そして最近のものとして「小さな親切、大きなお世話」があろう。なぜ小さな効果が、大きな結果をもたらすのか。小さな親切が小さなお世話ではなく、なぜ大きなお世話になるのか……。要するに。それは《合成の誤謬(虚偽)》である。つまり「個々の単語については真なることも、それを合成するときには偽となることによって生ずる虚偽である。」²⁸⁾ 別言すれば、個別的善意が集合することにより、結果的に本来の意図とは違う誤りが生ずることである。個別的善意の集積が、即社会全体の福祉(幸福)の十分条件とはならない。利他的行為《のみ》で、人間世界の《すべて》の課題が解決するほど、事は単純ではない。なぜならば、とにかく善意・善行は、(善いことをするのだから安易に)眼前に焦点がおかれやすく、感情的判断に陥りやすい。逆に悪意・悪行は、(悪いことをするのだから慎重に)中長期の計画性と理性的判断に基づくものになる。

したがって、利他的行為にかかわるには、かつて経済学修で指摘²⁹⁾されたマーシャル(Alfred Marshall)が唱えた《冷やかな頭脳されど温かい心情(cool head but warm heart)》³⁰⁾の態度が要求されよう。

結

利他的行為について考察してきた。その結果はすでに約言してあるので繰り返さない。社会福祉実践の基盤に、利他的行為の理念を置く根拠について私見を述べ、本稿の結びとしたい。

利他的行為の理念は、いわゆる対人援助の共通項目といえよう。とりわけ社会福祉実践の基盤とする所以は、その対象の特性にある。現在社会福祉の対象の通説は、広く国民一般とされている。だが、より具体的な社会福祉実践また理論研究からすれば、〈国民一般〉ではあまりに抽象概念すぎる。私は、社会福祉の対象を国民一般とする説に依拠するが、厳密には蓋然的な状況の変化による対象拡大ととらえている。つまり国民の《誰しも》ではなく、《誰かが》の蓋然性が高まったという実態認識による。しかし実際には、社会福祉の対象は、大多数は数量的には少数派（五割以下）の課題として出現し、客観的には根本原因が問えない不条理な苦痛を伴う存在である。例えば近年の国民的課題つまり生活不安の一つである〈要介護問題〉を実例で考えてみる。M県A市は「高齢者保健福祉事業計画」策定のため、市内在住の高齢者に関して実態把握を目的とした調査を実施、次のような集計結果³¹⁾を得た。平成12年度介護保険第一号保険者(65歳以上)7,871人中、要介護者・要支援者数897人(11.4%)となり、居宅介護サービス対象者数に限ってみれば、重度あるいは最重度の介護の必要な要介護度4・5の該当者数109人(1.4%)である。施設介護サービス対象者数は、191人(2.4%)である。これらの数値をいかに評価するかである。要介護者等は897人であり少数派(11.4%)であった。この少数派であることは、当該要介護者およびその介護者にとっての深刻さ・苦しみを何一つ軽減するどころか、その逆であろう。少数派であるがゆえに、一層の孤独感・寂寥感・焦慮感等々を与えずにはおかないのではなかろうか。

人類は長い年月をかけて努力の結果、社会福祉をはじめとする社会保障制度を創出した。現在わが国では、生活困窮については、公的扶助(生活保護法等)や年金保険・雇用保険といった社会保険制度が対応し、疾病・障害については、医療保険等が、そして本年4月からは、要介護については、介護保険が施行され対応するようになった。このように一応形式的には、整備・体系化された。

しかしながら、根本的な課題についての対応は、途半ばであろう。それは人間存在の不条理性つまり〈なぜ特定の個人が、社会保障制度、特に社会福祉等の対象となるのか〉の説明である。《なぜあなたが、……》《なぜ私が、……》の問い³²⁾に対する答えであり、説明である。無回答、説明不足が当事者にとっての「孤立感」を募らせる。社会福祉は、伝統的な対象把握の方法として“個別化”をとってきた。「社会福祉は個別処遇の世界である。それが個別処遇を方法とするという意味において、社会福祉は常に全人としての対象者と向い合うのである。」³³⁾(傍点引用者) ならば、ここで問われてくるのは、本稿で考察した利他的行為の理念つまり“悲”・「泣く者と共に泣きなさい」の態度である。これなくして社会福祉実践の起点³⁴⁾はなく、社会福祉の存在理由も喪失する。利他的行為は、既述のように幾つかの難点を孕んでいる。だが利他的行為の理念は、社

会福祉実践の第一の必要条件であり、その基盤となろう。

[10/15/2000]

註

- 1) 拙稿「社会福祉とは何か」(岡村順一編『社会福祉原論』, 法律文化社, 1994 年) p. 5.
- 2) 新村出編『広辞苑 第 5 版』(岩波書店, 1998 年) p. 2794.
- 3) クロボトキン「相互扶助論」(大沢正道他訳『クロボトキン I』(三一書房, 1970 年)。
- 4) 利他的行為と類似する概念として、近年の《ボランティア》がある。本稿では、それを利他的行為に包含するものと解する。ボランティアについては、「福祉の本質にかかわる重要な思想的基礎を持つもの」との見解がある。(阿部志郎『ボランティアズム』海声社, 1988 年, p. 40)。なお、他の学問分野における利他的行為に関する諸研究の考察、および比較検討等については今後の課題とする。
- 5) 例えば、留岡幸助……高瀬善夫『一路白頭ニ至ル』(岩波新書, 1982 年)、徳永恕……上笠一郎・山崎朋子『光ほのかねども』(朝日新聞社, 1980 年)、ゼノ・ゼプロスキー……石飛 仁『風の使者・ゼノ神父』(講談社, 1982 年) 等々数多くの慈善事業家、社会事業家ら活躍がある。
- 6) 白川 静『字通』(平凡社, 1996 年) p. 1550.
- 7) 池田敬正『現代社会福祉の基礎構造』(法律文化社, 1999 年) p. 91. 参照。
- 8) 中村 元他編『岩波仏教辞典』(岩波書店, 1989 年) p. 372, 並びに中村 元『慈悲』(平楽寺書店, 1956 年) 参照。
- 9) 田川建三『立ちつくす思想』(頸草書房, 1972 年) pp. 53-62. 参照。
- 10) 白川 静『字統』(平凡社, 1984 年) p. 713.
- 11) バルバローデル・コル訳『旧約新訳聖書』(ドン・ボスコ社, 1964 年) 新訳 p. 268. 参照。
- 12) 木村山治郎編『道歌教訓と歌辞典』(東京堂出版, 1998 年) p. 59.
- 13) 黒崎幸吉『註解・新約聖書・ルカ傳』(立花書房, 1955 年) pp. 119-122. 及び田川建三『イエスという男』(三一書房, 1980 年) pp. 33-45. 参照。
- 14) 市井三郎『歴史の進歩とはなにか』(岩波新書, 1971 年) 参照。この課題に関しては、『旧約聖書』「ヨブ記」が基本書といえる。なお本稿では、クシュナー・斎藤 武訳『なぜ私だけが苦しむのか』(岩波書店, 1998 年) を特に参照した。
- 15) 『旧約新約聖書』(ドン・ボスコ社, 1964 年) 新訳 p. 125.
- 16) 永井直治訳『新契約聖書・修正改版』(基督教文書伝道会, 1960 年) p. 172.
- 17) ナイチンゲール・湯植ます, 薄井坦子, 小玉香津子他訳『看護覚え書 第 5 版』(現代社, 1993 年) p. 217.
- 18) 市井三郎, 前掲書, p. 196.
- 19) 最近では, “利用者本位のサービス提供” が唱えられている。高齢者介護・自立支援システム研究会《新たな高齢者介護システムの構築を目指して》(1994 年) の第 2 章新介護システムの基本理念の重要な柱の一つとして位置づけられている。後の「介護保険法」(1997 年)《社会福祉基礎構造改革について(中間まとめ)》(1998 年)「社会福祉法」(2000 年) 等にもその考え(理念)は引き継がれている。
- 20) 薄井坦子『看護学原論講義・改訂版』(現代社, 1994 年) p. 51.
- 21) 体験, 経験と想像力との関係について, 次のような指摘がある。「私たちは経験したことしかわからないのです。しかも, 経験しないことでもわかる想像力をもっています。その想像力を豊かに養いたい願っています。同時に, 経験しないことは, ほんとうはわからないのではないかという謙虚さを失いたくないと思っています。人と人が相触れる社会福祉の世界で, 特にそのことが大事だと考えるのです。」(谷 昌恒「職業として福祉を志して」『社会福祉研究』第 51

- 号, 鉄道弘済会, 1991年, p. 27)。
- 22) 実践とは, 《仮説》をもった合目的的営為と指定する。
- 23) 負(マイナス)というものの再評価として, “闇の生産力”という発想もある。『続続・吉野弘詩集』(思潮社, 1994年) p. 112. 参照。
- 24) 『歎異抄』(岩波文庫, 1956年) p. 41.
- 25) 石田瑞麿編訳『日本の名著6・親鸞』(中央公論社, 1969年) pp. 83-84.
- 26) 大段智亮『人間相手の難しさ』(サンルート・看護研修センター, 1993年) p. 50.
- 27) 岸 良範「他者へのケアと自分のケア」(岸 良範, 佐藤俊一, 平野かよ子『ケアへの出発—援助のなかで自分が見える』医学書院, 1994年, 所収) pp. 23-28. 参照。
- 28) 『哲学事典』(平凡社, 1971年) p. 39.
- 29) 杉本英一『近代経済学の解明(上)』(岩波文庫, 1981年) pp. 18-19.
- 30) “cool head but warm heart”に関しては, すでに一番ヶ瀬康子『現代社会福祉論』(思潮社, 1971年)で, マーシャルの言葉として「冷たい頭と熱い胸—」(p. 46)と紹介され, 社会福祉界においても夙に標語的に使用されている。私が拘泥するのは, “but”をいかに解釈するのか。そして両者(冷やかな頭脳と温かい心情)の関係を比例配分率をも含めた具体的な解釈と, いかにしたら把持できるかの方法論の提示である。
- 31) 『多賀城市高齢者保健福祉事業計画書』(宮城県多賀城市, 2000年) pp. 42-45. なお痴呆性高齢者の将来推計としては, 今後の出現率を7-8%と予想している。約12人~14人に一人の確率である。(『老人福祉のてびき 平成11年度版』長寿社会開発センター, 2000年, p. 28.)
- 32) これに関して, 神谷美恵子は次のように書く。「世の中の幸不幸, 運不運についても, 少しよく考えてみると, なぜある人が不運にみまわれ, なぜこちらがそれを逸れたのか, ということについて, ほんとうの説明はない。」(神谷美恵子『人間をみつめて・著作集2』(みすず書房, 1980年, p. 63.)。因に註14)のクシュナー『なぜ私だけが苦しむのか』の第1章は「なぜ, 私に?」である。
- 33) 谷 昌恒「社会福祉における人権の思想」(『社会福祉研究』第12号, 鉄道弘済会, 1973年) p. 7. また同論文において社会福祉の思考方法について, 次のように論じる。「みたされない多くの条件のあるままに, 独立した人格としての幸福を確立すること, その確立をたずけること, それが社会福祉の理想である。みたされない条件が数多くあること, ボロボロの現実であるということ, そのことを是認するのではない。是認するものではないが, そうした事実があるということ, その事実のゆえに, すでに不幸を負った人間がいるということ, を直視して, そうした現実の中で, 不幸を幸福にかえる方途をさぐろうとすることが社会福祉の方法なのである。社会福祉とは兄弟同胞の荷を分かち担うことであるという私どもの理解は, そこに根底をおいている。」(p. 8.)。
- 34) 長谷川重夫は“喜ぶ者と共に喜び, 泣く者と共に泣きなさい”を援用しながら次のように論じる。「社会福祉の援助技術で, 第一義的に最も重要な課題の一つは, ワーカーが利用者の心の痛みにどこまで共感できるかにあるといえよう。」(石原正巳, 熊澤義宣監修『社会福祉と聖書—福祉の心を生きる』(リトン, 1998年, p. 254.)。